

大学生のキャリア選択における動機と パーソナリティ特性との関連¹

萩原俊彦

問題と目的

青年期は自分の価値観や信念、進路について真剣に考える時期である。こうした自己形成の問題が集約されてくるのがキャリア選択である。大学を卒業する時点で一つの職業を選択することは、個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係づけや価値づけの累積（文部科学省，2004）としてのキャリアを構築する上で、きわめて重要である。

その一方、大学生の就職活動は、一斉に雇用市場が開放され、そのタイミングに乗り遅れてしまうと本人にとって望ましい就職機会が得にくいという点で時間的制約が厳しく、有利な形での再挑戦も難しい。こうした点を考えれば、大学生のキャリア選択は人格的に発達する契機（若松，2008）にも、また、挫折や社会的排除といった危機にもつながりうるライフイベントであるといえよう。

特に、キャリア選択における危機の側面といえる職業未決定の問題は、これまでも多くの研究や論考で取り上げられてきた（e.g. 後藤，2008；松尾・佐野，1993；下山，1986）。また、大学を卒業して就職した後、3年以内に離職する率が3割台の高い水準にある状況も2000年代以降続いている（厚生労働省，2010）。心理学的立場に立てば、こうしたキャリア選択の問題解決への取り組みにおいては、大学生の就職活動への取り組みやキャリア意識形成における変化といった内的要因に対するアプローチを行うことになる。そうした立場から近年注目されてきたのが、キャリア選択における「やりたいこと志向」（日本労働研究機構，2000）である。

好きなことや自分のやりたいことを仕事に結びつけて考える傾向を指す「やりたいこと志向」は、当初フリーター特有のものとされた。しかし、現在では若者に広く支持される価値志向であることが示されている（安達，2004）。他方で、「やりたいこと」へのこだわりが就職活動への移行困難（大久保，2002）や、職業の社会的意義や公共性の軽視（下村，2003）

¹ 本論文は日本心理学会第73回大会（2009）で発表したデータを再分析し、論文として再構成したものである。

をもたらすという指摘もなされている。このように、自己の価値・興味に基づいてキャリア選択に関わる自己および環境の探索を行おうとする「やりたいこと探し」については、キャリア未決定との関連で、これまで賛否両論の見解が出されてきた（田澤，2006）。近年では、「やりたいこと探し」がキャリア未決定のどのような側面において問題なのか、検討が試みられるようになってきている（e.g. 安達，2008；若松，2008）。

この「やりたいこと探し」の問題を、キャリア選択の場面で何を重要視するのかという動機づけの問題としてとらえたのが萩原・櫻井（2008）である。萩原・櫻井（2008）は、大学生のキャリア選択における「やりたいこと探し」の動機を、自己決定理論（Ryan & Deci, 2000）の観点から明らかにしている。自己決定理論は、従来二項対立的に捉えられてきた外発的動機づけ－内発的動機づけを、相対的な自己決定性（自律性）の違いから連続的に捉えることを提唱した動機づけ理論である。この理論に準拠して、萩原・櫻井（2008）は、大学生がどれだけ自己決定的な動機で「やりたいこと探し」をしているか検討を行った。その結果、「やりたいこと探し」の動機は、自己の充足感を高めるためにやりたいことを探すという自己決定的な動機である「自己充足志向」、自分の社会的立場を安定させるためにやりたいことを探すという自己決定性の面で中間的な動機である「社会的安定希求」、周囲の人間に追随するためにやりたいことを探すという非自己決定的な動機である「他者追随」という3側面の動機から構成されることが明らかとなった。また、「やりたいこと探し」の動機の個人差と進路不決断との関連を検討したところ、「やりたいこと探し」の動機のうち、非自己決定的な動機が優勢である群は、進路不決断の面でも問題を抱えている可能性のあることが示された。これにより、「やりたいこと探し」をする際の動機の自己決定性レベルは個人によって異なること、また、その個人差がキャリア未決定に対して影響を及ぼす可能性が示唆された（萩原・櫻井，2008；2009）。

さて、本研究では、「やりたいこと探し」の動機の規定因として、indecisive 型未決定（特性としての未決定）の要因とされているパーソナリティ特性（Bacanli, 2006）との関連を検討する。職業未決定の初期の研究では、その様態の複雑さが指摘され、多様な職業未決定の様態が示されてきた。これを整理し、職業未決定をいくつかのサブタイプに分類する試みが行われてきたが、個人のパーソナリティ特性によって生じる職業未決定を、それ以外の要因による通常の職業未決定と分けて扱うべきであるとの主張がなされるようになった（Bacanli, 2006；Cooper, Fuqua, & Hartman, 1984）。さらに、Gordon（1998）は知見が統合しにくい状態にあったキャリア未決定の類型化に関する研究をレビューし、キャリア未決定の類型においては、「indecisive 型と undecided 型に相当するタイプ」と「（決めてきたこと・決められないこと）への快適さ（comfortness）の程度」だけがせいぜい共通する次元であるとした

(Gordon, 1998; 若松, 2001)。ここで, *indecisive* 型とは, 気質的に高い不安傾向を持つために未決定も慢性的状態となる, 特性としての未決定である。*undecided* 型とは, 進路を決めるための情報が不十分なために生じる, 状態としての未決定であり, 通常の学生に多く見られるタイプである。「快適さ」とは, 決定・未決定の状況にあることに対しての主観的な悩みの高低を指すものである。

キャリア未決定の研究において, *indecisive* 型のキャリア未決定と関連が深いとされてきたパーソナリティ特性は, 外的な統制の所在, 低い自尊感情, 高度なイラショナル・ビリーフなどである (Bacanli, 2006; Cooper, Fuqua, & Hartman, 1984; Nevo, 1987)。萩原・櫻井 (2008) においては, パーソナリティ特性との関連の検討は行われなかったが, キャリア選択にネガティブな影響をもたらす非自己決定的な「やりたいこと探し」の動機は, これらの要因から影響を受けている可能性が考えられる。よって, 本研究では, これらのパーソナリティ特性と「やりたいこと探し」の動機との関連を検討する。

自己決定理論 (Ryan & Deci, 2000) に基づけば, 自己決定性の高い動機は適応と正の関連があると予測される。このことから, 自己決定性の高い動機である「自己充足志向」は, キャリア未決定を抑制するとされるパーソナリティ特性から正の影響を受けやすく, 逆に, キャリア未決定を促進するとされるパーソナリティ特性から影響は受けにくい, 負の影響を受けると予測される。一方, 自己決定性の低い動機である「社会的安定希求」と「他者追随」は, キャリア未決定を抑制するとされるパーソナリティ特性から影響は受けにくい, 負の影響を受けやすく, 逆に, キャリア未決定を促進するとされるパーソナリティ特性から正の影響を受けると予測される。

したがって, 「やりたいこと探し」の動機尺度の「自己充足志向」は, 内的な統制の所在からは正の影響, 自尊感情からは影響がないか正の影響, イラショナル・ビリーフからは影響がないか, 負の影響が見られるであろう。一方, 「やりたいこと探し」の動機尺度の「社会的安定希求」と「他者追随」は, 内的な統制の所在・自尊感情からは影響がないか負の影響が見られ, イラショナル・ビリーフからは正の影響が見られるであろう。

方 法

調査対象

関東圏内の国立大学 1 校, 私立大学 2 校の大学生 227 名 (男性 131 名, 女性 91 名, 不明 5 名) を対象とした。内訳は, 大学 1 年生 84 名 (男子 47 名, 女子 37 名), 大学 2 年生 95 名 (男子 54 名, 女子 41 名), 大学 3 年生 32 名 (男子 21 名, 女子 11 名), 大学 4 年生 11

名（男子9名，女子2名），不明5名であった。平均年齢は19.30歳（ $SD=1.28$ ）であった。なお，まだ進路の確定していない大学生のキャリア意識を調査する目的から，調査時点で既に卒業後の進路が確定している可能性が高い4年生11名と学年・性別不明の5名を分析から除外した。これにより，分析対象者は211名となった。

調査時期および調査手続き

2008年6月に無記名の個別記入形式の質問紙で，大学の講義時間中に集団式で実施した。回答に要した時間は約15分であった。

調査内容

「やりたいこと探し」の様態を問う項目 将来仕事につく上での「やりたいこと」に限定して，「やりたいこと」を過去探していたのか，今探しているのか，過去も今も探していないのかについて回答を求めた。

キャリア決定・未決定を問う項目 若松（2001）の指標を用いて，（1）考慮している選択肢を全て挙げさせ，更に（2）『この進路なら目指すと決めてもう迷わないし，これ以上具体的に詰めるつもりがない』という選択肢はどれですか（他にまだ迷っている選択肢があっても構いません）。』の設問で，1つ以上の選択肢を挙げた者を決定者と見なした。

「やりたいこと探し」の動機尺度 萩原・櫻井（2008）が自己決定理論（Ryan & Deci, 2000）に基づいて作成した，キャリア選択における「やりたいこと探し」の動機を測定する尺度である。「自己充足志向」12項目，「社会的安定希求」9項目，「他者追随」4項目の，3つの下位尺度から構成される。なお，本研究では各下位尺度の合計得点を項目数で除した値を用いた。回答形式は「1 あてはまらない」から「5 あてはまる」までの5件法である。

Locus of Control 尺度（鎌原・桶口・清水，1982） この尺度は，行動が強化の生起と随伴しており，強化の統制が可能であるという信念を持っているかという「統制の所在」を測定する尺度である。外的統制を表す9項目（例「あなたの人生は，ギャンブルのようだと思いますか」）と，内的統制を表す9項目（例「あなたが幸福にあるか不幸になるかは，あなたの努力しただと思いますか」）の計18項目から構成される。回答形式は「1 そう思う」から「4 そう思わない」の4件法であり，合計得点が高いほど内的統制を意味するようにしてある。なお，本研究では合計得点を項目数で除した値を用いた。

自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982） Rosenbergの同名の尺度を翻訳した尺度であり，合計得点が高いほど自己全体を肯定的にとらえ，自己を高く評価していると考えられる。10項目からなり，「1 あてはまらない」から「5 あてはまる」までの5件法である。なお，

本研究では合計得点を項目数で除した値を用いた。

不合理な信念測定尺度（森・長谷川・石隈・嶋田・坂野，1994） Ellis が提唱した不合理な信念（irrational belief）を測定する尺度であり，自分の行為や能力に対する高い期待を表す「自己期待」，他人への依存の必要性を表す「依存」，面倒な事柄からの回避の必要性を表す「問題回避」，反道徳的な行為に対する非難を表す「倫理的な非難」，ならびに感情コントロールや欲求不満耐性の低さを正当化する「無力感」から構成される。5つの下位尺度ごとに4項目の計20項目で，回答形式は「1 まったくそう思わない」から「5 まったくそう思う」までの5件法である。なお，本研究では各下位尺度の合計得点を項目数で除した値を用いた。

「優柔不断さ」の項目 未決定の質を査定するための指標であり，若松（2001）が用いた「意思決定プロセスに先立つ困難さ」の下位カテゴリーである「優柔不断さ」4項目を使用した。「優柔不断さ」は indecisive 型の未決定者の特徴に含まれるものであることから採用した。本研究では合計得点を項目数で除した値を用いた。

結 果

(1) 「やりたいこと探し」の様態

調査実施時に「やりたいこと」を探しているかという質問への回答は、「過去に探していた」が26名（12.3%）、「探している」が175名（82.9%）、「過去も今も探していない」が8名（3.8%），無回答者2名（0.9%）であった。本論文は「やりたいこと探し」の動機とパーソナリティ特性との関連を検討することを目的としている。したがって，生態学的妥当性を保証する目的から，以下の分析では「やりたいこと探し」を「過去も今も探していない」と回答した者，ならびに本質問への無回答者の計10名を分析対象から除いた。これにより，以降の分析対象者は201名となった。

(2) キャリア決定の様態による調査対象者の分類

次に，若松（2001）の指標を用いて，調査対象者をキャリア決定・未決定の2群に分類したところ，決定群は87名（43.3%），未決定群は114名（56.7%）であった。更に，未決定群114名に関して，「優柔不断さ」の項目4項目を用いて若松（2001）と同様に評定平均3.5を基準に2群に分けたところ，3.5未満の未決定者（以後，未決定 undecided 群と呼ぶ）が69名，3.5以上の未決定者（以後，未決定 indecisive 群と呼ぶ）が45名となった。

(3) 「やりたいこと探し」の動機パターンとキャリア決定の様態との関連

「やりたいこと探し」の動機尺度の下位尺度である「自己充足志向」「社会的安定希求」「他者追随」を Z 得点に換算し、それを用いてクラスタ分析 (k-means 法) を行った。各クラスタに含まれる調査対象者の数、クラスタの解釈可能性、自己決定理論との整合性などから総合的に判断した結果、3 クラスタによる分類が「やりたいこと探し」の動機パターンを最もよく表していると考えられた (Figure 1)。

各クラスタの特徴は、以下の通りである。

第 1 クラスタ: 「自己充足志向」「社会的安定希求」が相対的に最も低く、「他者追随」は第 3 クラスタほどではないものの、平均より低い群である。以上から、この群を「低動機群」とした。

第 2 クラスタ: 非自己決定的な「他者追随」が相対的に最も高く、次いで自己決定の面で中間的な「社会的安定希求」、自己決定的な「自己充足志向」という順に低くなる群である。なお、非自己決定的な動機が優位であるが、「自己充足志向」も平均程度であるため、重視する動機が拡散しているのとらえることができる。このことから、この群を「拡散的動機群」とした。

第 3 クラスタ: 自己決定的な「自己充足志向」が他の 2 動機よりも相対的に最も高く、次いで自己決定の面で中間的な「社会的安定希求」、非自己決定的な「他者追随」という順に低くなる群である。なお「他者追随」については 3 クラスタの中で最も低い得点である。以

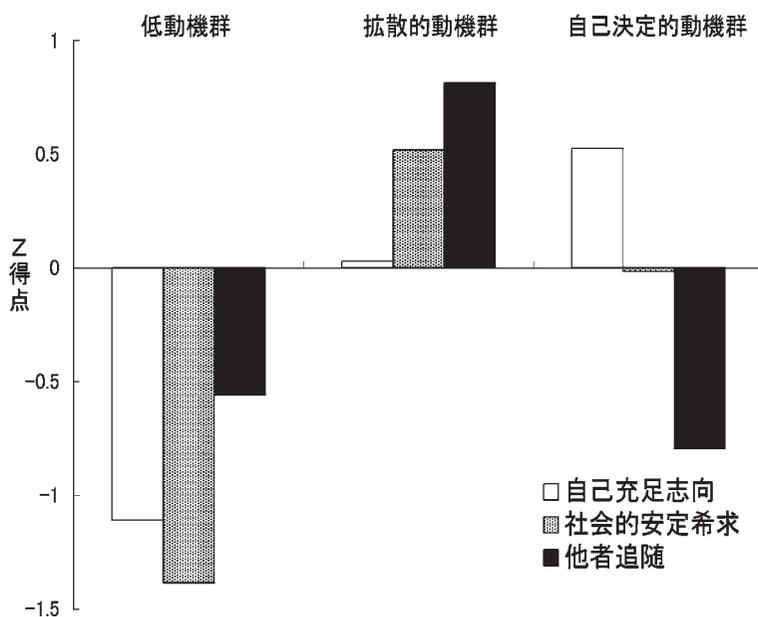


Figure 1 「やりたいこと探し」の動機尺度のクラスタパターン

上から、この群を「自己決定的動機群」とした。

なお、分析対象者 201 名のうち、低動機群は 32 名、拡散的動機群は 96 名、自己決定動機群は 73 名であった。

次に、「やりたいこと探し」の動機のクラスタパターン（低動機群、拡散的動機群、自己決定的動機群）別にキャリア決定の様態を比較したところ（Table 1）、有意な人数比率の偏りが見られた（ $\chi^2=11.85, df=4, p<.05$ ）。残差分析を行った結果、未決定 undecided 群では低動機群が有意に多く、拡散的動機群が有意に少なかった。一方、未決定 indecisive 群においては拡散的動機群が有意に多かった。

(4) 重回帰分析

「やりたいこと探し」の動機と Locus of Control, 自尊感情, 不合理な信念との関連を検討するため、「やりたいこと探し」の動機尺度の 3 つの下位尺度（自己充足志向・社会的安定希求・他者追隨）を基準変数とし、Locus of Control 尺度, 自尊感情尺度, 不合理な信念測定尺度の各下位尺度を説明変数とした重回帰分析（ステップワイズ法；変数の投入基準 $p<.05$, 除去基準 $p>.10$ ）を行った（Figure 2）。その結果、「やりたいこと探し」の動機のうち、「自己充足志向」に対しては、Locus of Control から有意な正の影響（ $\beta=.21$ ）が見られたことを除き、他の変数からは有意な影響は見られなかった。「社会的安定希求」については、不合理な信念の「依存」「倫理的非難」からそれぞれ有意な正の影響（順に、 $\beta=.21$ ； $\beta=.18$ ）が見られた。また、「他者追隨」に対しては自尊感情から有意な負の影響（ $\beta=-.15$ ）が見られ、不合理な信念の「依存」から有意な正の影響（ $\beta=.31$ ）が見られた。

次に、キャリア決定の様態別に「やりたいこと探し」の動機と Locus of Control, 自尊感情,

Table 1 「やりたいこと探し」の動機パターンとキャリア決定の様態

	<i>n</i>	決定群	未決定 undecided 群	未決定 indecisive 群
低動機群	32	12 (13.8) <u>-0.72</u>	16 (23.2) 2.04 *	4 (8.9) <u>-1.46</u>
拡散的動機群	96	44 (50.6) 0.70	23 (33.3) <u>-2.96 **</u>	29 (64.4) 2.54 *
自己決定的動機群	73	31 (35.6) <u>-0.18</u>	30 (43.5) 1.53	12 (26.7) <u>-1.53</u>
合計	201	87 (100.0)	69 (100.0)	45 (100.0)

a) 括弧内は行和の %.

b) 下線を付した数値は調整された残差である.

c) $\chi^2=11.85, df=4, p<.05$.

* $p<.05$, ** $p<.01$.

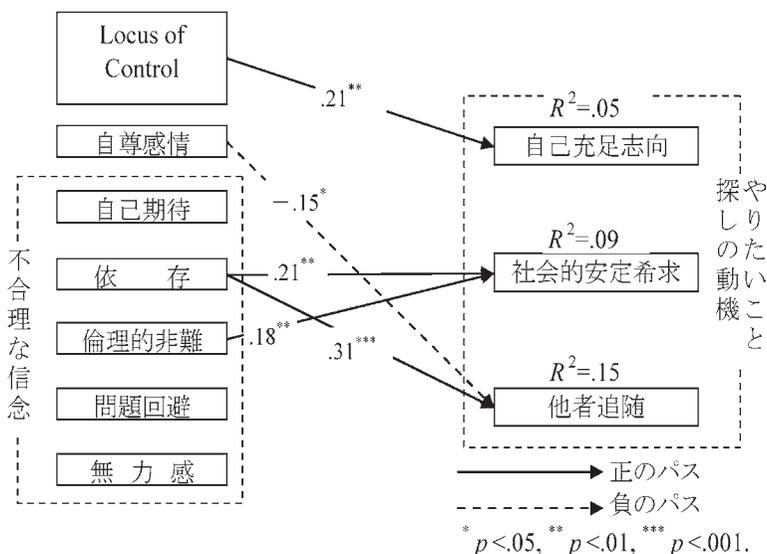


Figure 2 「やりたいこと探し」の動機尺度に対する重回帰分析の結果 (全体, $n = 201$)

不合理な信念との関係を検討するため、決定・未決定 undecided・未決定 indecisive の 3 群に分けて同様の重回帰分析を行った (ステップワイズ法; 変数の投入基準 $p < .05$, 除去基準 $p > .10$)。

その結果、決定群では「やりたいこと探し」の動機のうち、「自己充足志向」に対しては有意な影響は見られなかった。「社会的安定希求」に対しては、Locus of Control から有意な負の影響 ($\beta = -.28$), 不合理な信念の「自己期待」から有意な正の影響 ($\beta = .25$) が見られた。「他者追随」に対しては、不合理な信念の「依存」から有意な正の影響 ($\beta = .28$) が見られた (Figure 3)。

未決定 undecided 群では、「やりたいこと探し」の動機のうち、「自己充足志向」に対して自尊感情および不合理な信念の「無力感」から有意な正の影響が見られた (順に $\beta = .33$; $\beta = .37$)。「社会的安定希求」に対しては、不合理な信念の「倫理的な非難」から有意な正の影響 ($\beta = .35$) が見られた。「他者追随」に対しては、不合理な信念の「依存」から有意な正の影響 ($\beta = .29$) が見られた (Figure 4)。

未決定 indecisive 群では、「やりたいこと探し」の動機のうち、「自己充足志向」に対して Locus of Control から有意な正の影響が見られた ($\beta = .42$)。「社会的安定希求」に対しては、いずれの説明変数からも有意な影響は見られなかった。「他者追随」に対しては、自尊感情から有意な負の影響 ($\beta = -.45$), 不合理な信念の「自己期待」から有意な正の影響 ($\beta = .28$) が見られた (Figure 5)。

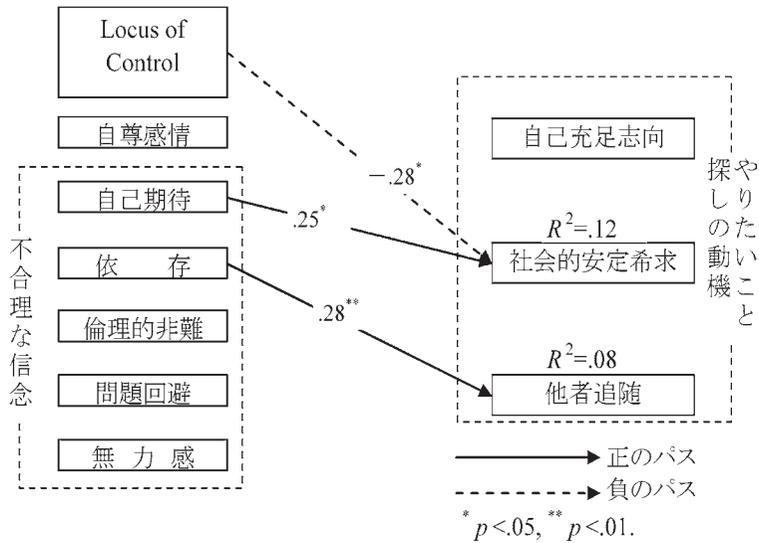


Figure 3 「やりたいこと探し」の動機尺度に対する重回帰分析の結果 (決定群, $n=87$)

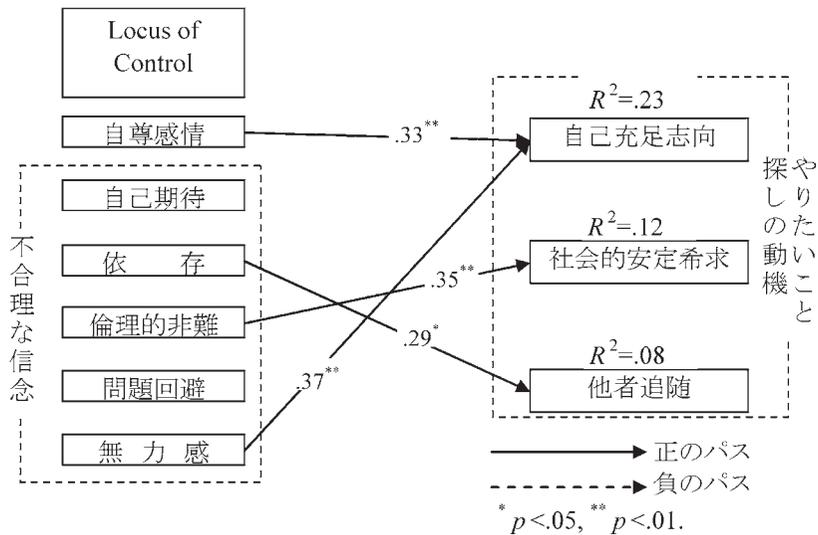


Figure 4 「やりたいこと探し」の動機尺度に対する重回帰分析の結果 (未決定 undecided 群, $n=69$)

考 察

本研究では、「やりたいこと探し」の動機の規定因として、indecisive 型未決定（特性としての未決定）の要因とされているパーソナリティ特性（Bacanli, 2006）との関連を検討した。

まず、「やりたいこと探し」の動機パターンの個人差とキャリア決定の様態との関連につ

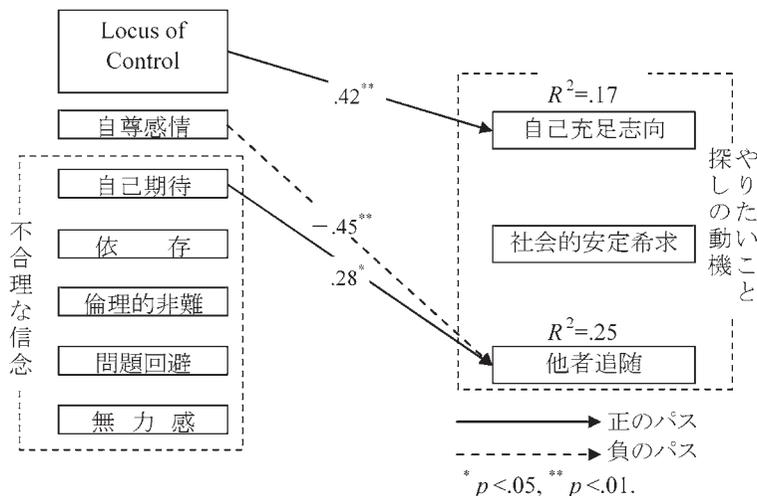


Figure 5 「やりたいこと探し」の動機尺度に対する重回帰分析の結果 (未決定 indecisive 群, $n = 45$)

いて検討を行った。その結果、未決定 undecided 群では「やりたいこと探し」の動機が全般的に低い低動機群が有意に多く、非自己決定的な動機が優勢な拡散的動機群が有意に少なかった。一方、未決定 indecisive 群では拡散的動機群が有意に多かった。この結果は、同じ未決定でも undecided 群と indecisive 群では質の面で異なる未決定の状態にあることを示唆するものと考えられる。自己決定理論 (Ryan & Deci, 2000) ならびに萩原・櫻井 (2008 ; 2009) の結果から推測すると、非自己決定的な動機が高い拡散的動機により行われる「やりたいこと探し」は適応的でない結果と関連すると考えられる。このことから、未決定 indecisive 群は「やりたいこと探し」の動機づけの面からも、キャリア決定において問題を抱えている可能性があると考えられる。なお、未決定 undecided 群で低動機群が有意に多かったことについては、「やりたいこと探し」をキャリア決定において必要不可欠な行動ととらえている人ととらえていない人が混在する可能性が示唆されており (萩原, 2009), 低動機であるからといって不適応的とは言い難いことに留意する必要がある。

次に、重回帰分析の結果から「やりたいこと探し」の各動機に対するパーソナリティ特性の影響について検討した。その結果、「自己充足志向」は、全体としては内的な統制の所在や自尊感情の高さから正の影響が見られ、不合理な信念からの影響は見られなかった。この点では、自己決定理論からの予測に合致する結果であったと考えられる。ただし、未決定 undecided 群では感情コントロールや欲求不満耐性の低さを正当化する「無力感」から正の影響が見られた。この結果の解釈は難しいが、自分が未決定状況にあることで喚起される辛さを、将来就く仕事に対する充足感で正当化しよう、という未決定 undecided 群の意図を示

唆しているのではないかと考えられる。

次に「社会的安定希求」は、全体として内的な統制の所在から負の影響、自己期待や依存、倫理的な非難といった不合理な信念から正の影響が見られた。そして「他者追随」は、自尊心から負の影響が、自己期待や依存といった不合理な信念から正の影響が見られた。以上のように、パーソナリティ特性は、自己決定理論が示す動機の自己決定性の高低に呼応する形で「やりたいこと探し」の各動機と関連していた。したがって、仮説は大枠において支持されたのではないかと考えられる。しかし、未決定の様態別（決定／未決定 undecided／未決定 indecisive）に検討した結果からは、群ごとの明確な差異は示されなかった。よって、「やりたいこと探し」の各動機に対するパーソナリティ特性の影響については、調査内容の精選や調査時期の吟味等の面において、更なる検討が必要である。

イラショナル・ビリーフからの影響について、重回帰分析の結果を通して見ると、不合理な信念に含まれる「自己期待」「依存」「倫理的な非難」が、「やりたいこと探し」の動機尺度の「社会的安定希求」と「他者追随」に対して正の影響を与えていた。不合理な信念の「自己期待」と「依存」が示しているのは完全主義と他者への依存であるが、これに類したイラショナル・ビリーフは、キャリア心理学の領域でも指摘されている。Nevo (1987) は、キャリア選択において不決断や欲求不満を招く 10 個の不合理な期待を挙げているが (Table 2)、その項目の多くが本研究で影響が見られた「自己期待」や「依存」に関連する内容となっている。このことから、本研究の結果は、キャリア選択において完璧な選択や過度に高い達成を求めようとしたり、他者に依存してキャリア選択を行おうとしたりする傾向が、「やりた

Table 2 キャリア選択において不決断や欲求不満を招く 10 個の不合理な期待 (Nevo, 1987)

<職業に関する不合理な期待>

1. 私にとって適した職業はたった一つしかないであろう。
2. 完璧な職業選択肢を見つけるまで、私は満足しないであろう。

<カウンセラーやテストに関わる不合理な期待>

3. 他の誰かが私にとってふさわしい職業を見つけられる。
4. 知能テストによって自分がどれくらいの価値があるかわかるであろう。

<自己に関する不合理な期待>

5. 私は仕事の領域で熟達するか、大きな成功を取めなくてはならない。
6. 私は一生懸命やれば何でもできる、あるいは、自分の才能に合わなければ私は何もできない。
7. 自分の人生において、私の仕事は重要な人々を満足させなければならない。
8. 職業に就けば、私の全ての問題は解決するであろう。

<意思決定過程における不合理な期待>

9. 私は、職業が自分にとって適していると直感的に感じなければならない。
10. 職業選択は一度きりの行為である。

a) 田澤 (2005) を参考にして、Nevo (1987) から筆者が新たに和訳したものである。

いこと探し」の動機のうち自己決定性の低い「社会的安定希求」や「他者追随」を高める可能性を示唆するものと考えられる。「倫理的非難」については考察が難しいが、不合理なまでの道徳的信念を持つという点で、自分が社会から要求される「やりたいこと探し」をできなければ、悩みが深まったり社会的に不利な立場に追い込まれる、といった強迫的な観念の高さに通じるのではないだろうか。そういう点で、社会から「やりたいことを持っていないといけない」という圧力（乾, 2001; 2002）を感じている人は、「社会的安定希求」が高くなると考えられる。

もちろん、本研究の対象者は一般の大学生であるため、こうしたパーソナリティ特性の要因に強く規定される典型的な *indecisive* 型の未決定者は少数であろう。*indecisive* 型の未決定者はキャリア選択過程に対して過剰な不安を抱いたり、生活全般に対する過剰な不安を有したりするため、キャリア選択できない深刻な状況におかれている（Gordon, 1998）。本研究の重回帰分析における R^2 値が全般に低いことは、このような少数派の未決定者が有するパーソナリティ特性の要因が、一般の大学生においてそれほど強い影響力を持たないことを示唆している。こうした完全主義的傾向や依存的傾向は、程度の差はあれども一般の大学生にも見られる心性である。しかし、上記の結果は本研究の限界を示すものと言えるであろう。したがって、対象者の未決定状況や属性をより綿密に限定した上での検討が、今後の研究において必要である。

引用文献

- 安達智子 (2004). 大学生のキャリア選択—その心理的背景と支援— 日本労働研究雑誌, **533**, 27-37.
- 安達智子 (2008). 女子学生のキャリア意識—就職動機, キャリア探索との関連— 心理学研究, **79**, 27-34.
- Bacanli, F. (2006). Personality characteristics as predictors of personal indecisiveness. *Journal of Career Development*, **32**, 320-332.
- Cooper, S.E., Fuqua, D.R., & Hartman, B.W. (1984). The relationship of trait indecisiveness to vocational uncertainty, career indecision, and interpersonal characteristics. *Journal of College Student Personnel*, **25**, 353-357.
- Gordon, V.N. (1998). Career decidedness types: A literature review. *Career Development Quarterly*, **46**, 386-403.
- 後藤宗理 (2008). 思春期・青年期を中心とした研究の動向 教育心理学年報, **47**, 61-70.
- 萩原俊彦・櫻井茂男 (2008). “やりたいこと探し”の動機における自己決定性の検討—進路不決断に及ぼす影響の観点から— 教育心理学研究, **56**, 1-13.
- 萩原俊彦・櫻井茂男 (2009). 「やりたいこと探し」の動機とキャリア選択における意思決定の困難さとの関連 筑波大学心理学研究, **38**, 79-87.
- 乾 彰夫 (2001). 高卒無業者・フリーターの発生要因と社会的性格—近年の諸調査の批判的検討を通して— <教育と社会>研究, **11**, 1-10.

- 乾 彰夫 (2002). 職業教育・進路指導の充実は「フリーター問題」を解決できるか 労働の科学, **57**(2), 19-22.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直浩 (1982). Locus of Control 尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討 教育心理学研究, **30**, 303-307.
- 厚生労働省 (2010). 労働経済白書—平成 22 年版労働経済の分析 [平成 22 年 8 月 3 日閣議配布]— <<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/10/dl/01-1.pdf>> (2010 年 12 月 26 日)
- 松尾雄毅・佐野秀樹 (1993). 職業未決定の類型と処遇—アメリカと日本における研究の概観— 東京学芸大学紀要第一部門, **44**, 273-286.
- 文部科学省 (2004). キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために— <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002/010.pdf> (2010 年 12 月 26 日)
- 森 浩子・長谷川浩一・石隈利紀・嶋田洋徳・坂野雄二 (1994). 不合理な信念測定尺度 (JIBT-20) の開発の試み ヒューマンサイエンスリサーチ, **3**, 43-58.
- Nevo, O. (1987). Irrational expectations in career counseling and their confronting arguments. *The Career Development Quarterly*, **35**, 239-250.
- 日本労働研究機構 (2000). フリーターの意識と実態—97 人のヒアリング結果より— JIL 調査報告書 No. 136.
- 大久保幸夫 (2002). 新卒無業。なぜ、彼らは就職しないのか 東洋経済
- Ryan, R.M. & Deci, E.L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, **55**, 68-78.
- 下村英雄 (2003). 調査研究から見たフリーター—フリーターの働き方と職業意識— 現代のエスプリ, **427**, 32-44.
- 下山晴彦 (1986). 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, **34**, 20-30.
- 田澤 実 (2005). キャリア教育の導入と今後の進路選択研究の展望—大学生を対象にした実証的研究のレビューに基づいて— 中央大学大学院論究 文学研究科篇, **37**, 189-201.
- 田澤 実 (2006). 大学生における進路未決定とキャリア形成支援の課題—職業生活への移行困難な若者との対比から— 中央大学大学院研究年報 (文学研究科篇), **35**, 141-152.
- 若松養亮 (2001). 大学生の進路未決定者が抱える困難さについて—教員養成学部の学生を対象に— 教育心理学研究, **49**, 209-218.
- 若松養亮 (2008). undecided 型の進路未決定者に対する意思決定支援プログラムの開発と評価 研究成果報告書 (滋賀大学教育学部), 1-26.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.